

教授
塚本 美紀

■ 学歴

1. 2005年 テンプル大学修士課程 卒業

■ 学位

1. 2005年 修士（教育学）

■ 研究分野

1. 英語教育学
- 2.
- 3.

■ 研究キーワード

1. 異文化理解教育
2. 異文化理解・対応力の測定
3. ESD (Education for Sustainable Development)

■ 研究課題

1. 異文化理解教育に関して、異文化理解・対応力の測定について中心に考察する。
2. 持続発展可能な社会の在り方について、英語教育および国際理解教育の観点から考察する。

■ 担当授業科目

1. グラマー・コンポジション I（前期）
2. 専門演習 I（前期）
3. 教育ボランティア演習（前期）
4. 英語教科教育法 I（後期）
5. 専門演習 II（後期）
6. 教職実践演習（中・高）（後期）
7. 北九州の過去・現在・未来（後期）
8. 地域プロジェクト（後期）
9. 教育に ICT 活用（後期）
10. 卒業研究（通年）
11. 教育実習事前事後指導（通年）
12. 教育実習 II（通年）

■ 授業を行う上で工夫した事項

※ 助教・助手については、実習・演習等の指導を行う上で工夫した事項

1.	授業科目名【 グラマー・コンポジション I 】 学生が予習、授業、復習の流れの中で、学習項目を習得できるように、重要な文法項目や表現に繰り返し触れることができるよう設計されている教材を使用した。質問の時間を十分にとったり、LINE やメールで質問を受け付けるようにしたりして、学生の疑問にすぐに答えられるようにした。
2.	授業科目名【 専門演習 I 】 国際語としての英語の在り方について、学生が理論と実践の両面から理解できるように、さまざまな文献を読んだり、さまざまな国の人々とインターネットを利用して英語で交流したりする機会が持てるようにした。
3.	授業科目名【 教育ボランティア演習 】 学生が板櫃中学校の英語の授業にアシスタントとして参加できるようにしたが、事前に中学校での英語教育及びボランティアについて学習し、事後には担当してくださった中学校の先生方からのフィードバックをもらい、理論と実践が結びつくよう工夫した。
4.	授業科目名【 英語教科教育法 I 】 学習指導要領の改訂に鑑み、学生たちが中学校や高等学校で学んできたことと現行の学習指導要領との違いがわかるよう解説した。毎回、授業の内容に関連することについてのレポートの提出を求め、学修したことの理解を深めるようにした。
5.	授業科目名【 専門演習 II 】 来年度の卒業論文の執筆に備え、各学生が自分の興味のある分野の書籍や論文についてのプレゼンテーションを実施する機会を設けた。また、それについての質疑応答を通して、テーマ設定が適切であるかどうか考えさせた。
6.	授業科目名【 教職実践演習（中・高） 】 教育実習での経験を活かして模擬授業の教案を作成し、実施してもらうようにすることで、教育実習での実践を振り返ることができるようにした。また、教育活動を行う際、どのようなリソースを活用できるか、教育実習での実践を振り返りながら討論した。
7.	授業科目名【 北九州の過去・現在・未来 】 北九州に関する新聞記事、書籍、映像などを用いたり、外部講師による講演を行うなどして、北九州について多角的に捉えられるよう工夫した。また、それぞれが学ぶ専門分野がどのように地域に貢献できるかということについて考察できるようにポスターセッションを行った。
8.	授業科目名【 地域プロジェクト 】 人文学部の学生が、それぞれが学んでいる専門分野の知識や技能を活かし、企業や地域の人々と協働することができるようなプロジェクトをスムーズに行えるように、地域について学ぶ授業を行った。
9.	授業科目名【 教育における ICT 活用 】 新しい分野で、さまざまな実践が試されている状況であるが、中でも成果が上がっているものなるべく紹介するようにした。また、授業の中でもなるべく ICT を活用し、授業の中でどのように使用することができるのかということを学生が実感できるようにした。

10.	<p>授業科目名【卒業研究】</p> <p>計画的に卒業論文を執筆できるように、論文の書き方や執筆のスケジュールについてのガイドラインを作成した。また、自らが設定したテーマについての思考を深められるように、定期的に進捗状況を発表してもらい、他のゼミ生から質問に答える機会をもった。</p>
11.	<p>授業科目名【教育実習事前事後指導】</p> <p>市内の中学校で英語科教諭として活躍する卒業生や英語科教諭として活躍された後校長として中学校で勤務されている先生に外部講師として講演していただき、いろんな面から教師としての在り方について学生が学べるようにした。</p>
12.	<p>授業科目名【教育実習 II】</p> <p>教育実習については、受け入れ校によって対応が大きく異なることもあるので、全体での指導は汎用性のあるものに留め、個別の案件については臨機応変に対応できるよう学生と電子メールやSNSですぐに連絡がとれるようにして対応した。</p>

■ 学会における活動

	加入時期	所属学会等の名称	役職名等（任期）
1.	1990年9月～現在に至る	アクロス「英語教師のための異文化研究会」	理事（2008年8月～現在に至る）
2.	2017年4月～現在に至る	日本ESD学会	会員
3.	2017年6月～現在に至る	北九州サステナビリティ研究所	会員
4.	2021年12月～現在に至る	日本比較文化学会	会員

■ 研究業績等に関する事項（2023年度）

	発行又は発表の年月	著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）					
1.	2023.5	わたしの異文化体験－エッセー集－	共	ACROSS 出版局	<p>① 語学教育に携わる者の視点から、それぞれの異文化体験について考察し、まとめたもの。</p> <p>② 編集委員：辻莊一、河野良子 共著者名：井川好二、塚本美紀、他16名</p> <p>③ 担当部分：「わたしの異文化体験：古城と帽子」(p. 99 - p. 105) 総頁数：p. 159</p> <p>④ A5判</p>
2.					
3.					

(学術論文)					
1.	2023. 7	大学における社会人基礎力育成の考察－女子大学と地方自治体の連携活動を事例として－	共	比較文化研究 No. 152	① 女子大学と地方自治体の連携活動を事例として、大学における社会人基礎力育成の在り方について考察したものの。 ② 共著者名：神崎明坤、高橋幸夫、塚本美紀 ③ 共同研究につき、本人担当部分抽出不可能 (p. 29 – p. 41)
2.					
3.					
(翻訳)					
1.					
2.					
3.					
(学会発表)					
1.	2024. 2	Exploring English Language Education and Motivation: A Case study of Japanese Female Immigrants in New Zealand	共	20 th CamTESOL Conference (於 カンボジア工科大学)	① 日本で教育を受けた後にニュージーランドに移住した人たちの移住前と移住後の英語学習とその動機付けについての考察 ② 共同発表者：Miki Tsukamoto, Mika Fujimoto, Hiromi Inagawa
2.					
3.					

■ 外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）

(1) 共同研究				
	研究題目	交付団体	研究者 ○代表者（）内は学外者	交付決定額 (単位：円)
1.	日本と中国における大学キャリア教育に関する研究－女子大学生の社会人基礎	西南女学院大学	○ 神崎 明坤 高橋 幸夫 塚本 美紀	950,000

	力の育成を中心として一		坂田 美登里 (林 楽 常) (王 小 燕) (張 小 光)	
2.				
3.				

(2) 個人研究				
	研究題目	交付団体	交付決定額 (単位：円)	備考
1.				
2.				
3.				

■ 社会における活動

	任 期 期 間 等	団体・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等
1.	1993年7月～現在に至る	日本英語検定協会	面接委員
2.	2010年4月～現在に至る	北九州 ESD 協議会	会員
3.	2015年6月～現在に至る	Zonta International	会員
4.	2021年4月～現在に至る	福岡県立小倉西高等学校学校関係者評価委員会	評価委員
5.	2021年7月～現在に至る	北九州市立ユースステーション	アドバイザーボード

■ 学内における活動等（役職、委員、学生支援など）

	任 期 期 間 等	会議・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等
1.	2014年4月～現在に至る	ハラスメント	相談員
2.	2016年4月～現在に至る	教職員懇親会	委員
3.	2018年4月～現在に至る	入学試験会議	委員
4.	2018年4月～現在に至る	学生募集委員会	委員
5.	2021年4月～現在に至る	総合人間科学小委員会	委員
6.	2022年4月～現在に至る	教職課程委員会	副委員長
7.	2014年4月～現在に至る	ゴールデン Z クラブ	顧問